

家族

藤原てい

家族

藤原てい

読売新聞社

家族^{かぞく}

著者——藤原^{ふじわら}てい

編集人——谷^や亀利一

発行人——堀^{ほり}内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 〒一〇〇

大阪市北区野崎町八の一〇 〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の二一 〒八〇二

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——昭和六十二年二月二十日

定価——一、一〇〇円

©1987, Tei Fujiwara

ISBN 4-643-87005-2 C 0095

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

家族
目次

第一章

家

家の改築 9

亡き夫の部屋 12

家がくず

れて行く 16

私の部屋 20

槌の音 23

雨の音 26

ついの住み家 29

第二章

夫

運輸大臣賞 35

直木賞 40

三十年代 44

カンズメにされた夫 48

第三章

子供

次男の骨折 55

息子の婚約者 59

国際派

63 家族全員集合 66

私の孫たち 69

第四章 妻

.....75

病氣回復 77 旧満州時の友 82 北朝鮮へ

出発前 87 北朝鮮紀行 91 弟 125 新し

い洋服 131 靴 134 エンピツ 138 貧しい

日々 142 新幹線 145 ラーメン 149 スコ

ットランド 152 スイス 158 十月のスケジ

ュール 162 聴衆 166 音楽的な音 170 教

育について 173

あとがき

.....177

著者紹介

.....187

装丁 重原保男

家

族

第一章 家

家の改築

深夜、私は一人で納戸の中にいた。誰もいないこの大きなあばら屋の午前一時すぎは、うす気味悪い。馴れているとはいえ、かすかなもの音にも耳を傾ける。それでも私は一生懸命に働いている。長い間、しまい込んであった衣類を、並んだ茶箱から引き出す作業である。

春先の大雪で、北側の屋根がくずれ落ちた時に、私はこの家を改築する決心をした。しかし、心をきめるまでには、自分自身に対してかなりの抵抗があった。四十年住み馴れた家である。しかも、戦後、間もなく建てたものである。あの頃、日本も貧しかった。ましてや、引き揚げ者の身で、より貧しく苦しく、その上に私の身体は、引き揚げの苦勞が残っていた。若い夫婦と、幼い子供達三人。住む場所を求めて、さまよったあげく、借金を重ねて、古い材木を集めて、やっと、かたちばかりの家が出来上がった。それでも、青い畳が並んだ時、私は思わず涙をこぼしていた。それはやっと雨露をしのぐ場所を得たというよろこびであった。

それから四十年がすぎて、子供達はそれぞれに社会人として自分の家庭を持って、この家を出ていってしまった。やがて夫までもが一人で逝ってしまった。

そして私一人が年老いて残されている。

思いだけがあふれて来る。一枚のフスマもガラス戸も、畳も、そして傷ついて赤さびた洗面所までもが重い歴史を背負って私に迫って来た。それを今、破壊し去ろうと決心をしたのである。無惨である。残酷である。

しかし、「頭上に御注意を」という札を屋根からぶら下げなくてはいけなくなった時に、心をきめた。それに私もすでに六十歳の半ばをすぎている。体力は目にみえて落ちている。残された命を思う時に、やはり決行すべきだと考えた。

「出来るだけ、今住んでいる家に似たものを」という注文のもとに。

夫の衣類を茶箱から取り出した。防虫剤の匂いと一緒に夫の匂が、うす暗い箱の中から浮かび上がって来る。紺の洋服も、毛のシャツも、コートも、つつましく、丁寧に折りたたんである。それはまだ夫が気象庁の役人であった頃のものであった。この家の借金を重く背負い込んでいるうえに、育ち盛りの三人の子供をかかえている時代であった。

「オレの月給は食うだけで終わるねえ」

そんな夫の言葉が思い出された。その通りで、衣類などに廻る余裕はなかった。ただ、暑さ、

寒さを、しのぐだけ。そんな中で、買い求めたものである。全く質素なものだけれども、その時代の喜びも、悲しみも、将来に対する希望も勇氣も、不安もみんなみなこれ等の衣類には、しみ込んでいた。それを一枚一枚引っぱり出して眺めていると、なんともいとおしく、胸が熱くなってきた。それはあまりにも長く生きすぎた者のあふれる心なのかも知れない。いや、行く先のみじかい者の思いかも知れない。

大きな呼吸をした。そしてまた、一枚一枚を取り出してゆく。深夜の作業には馴れている。あるいはそれが私の生活なのかも知れない。原稿を書くのは殆んど夜中である。深い夜、ペンを走らせるのが、いつの間にか習慣になってしまっている。ふとペンを落とす時など、あたりへ鳴りひびくような音がする。それはむしろ、私にとっては快い音に響く。ペンの走る音は音楽にさえ聞こえることもある。実に充実して楽しく、苦しい時間なのに、なぜ、茶箱から夫の衣類を出す作業は切ないのだろうか。

激しく夫が恋しいと思う。激しくこの家がいとおしいと思う。私は、もう一度、腰をのびして深呼吸をしてみた。

亡き夫の部屋

「家を一軒、新築すれば一か月は寝込む」

と、よく母は言っていた。その頃は聞き流していたけれども、いざ自分が責任を持ってそれをするになると、今更のように母の言葉を思う。覚悟はきめて取りかかったものの、まず経済的な重荷がずしりと両肩にのしかかって来た。人間一人が雨露をしのぐ家なのに、これほどの煩瑣な仕事を繰り返さなくてはいけないのか。つい古代の住居などがうらやましくなる。

設計の段階から、何十辺、何百辺、業者との打ち合わせをしたことか。これで半年間を費やしたことになる。一つの窓も、一枚の戸も、すべて、その材質、かたち、色、ハンドルの金具に至るまで細かい取りきめである。

「私の部屋と主人の部屋とを中心に考えてください。あとはすべて付属物なのですから」

この言葉に業者は私の顔を見た。すでにこの世にいない夫のことである。

しかし、いつ帰って来ても困らないようにと、それは私の祈りにも似ていた。かぎりある土地で、切りつめた経済の中で設計をするのだから、必要のないであろう部屋を取るのは無理であっ

たかも知れない。

「そうですか」

あえて誰も反対はしなかった。私の言葉におそれをなしたのか、あるいは同情をしたのか。とにかく賛成してくれた。その上に、庭先の柿の木が問題になった。設計通りに工事を進めてゆくと、当然、邪魔になる場所にそれはあった。

夫が植えて三十年にはなるだろうか。春にはもえ黄色のやわらかな葉をひろげ、夏にはみどり濃い日かげを作ってくれた。秋が来れば透明な空気の中に、赤い実が重なってみものった。それは幼なかった子供達のおやつになり、庭先へ来る小鳥達の餌になった。落葉の散る頃、かき集めた中で焼芋を作った。いわば、家族と一緒に生きて来て、いまはすでに枝は二階の窓に届いている。

その木が、今、建築の邪魔になった。

「絶対に切らないでくださいね」

庭のほぼ中央にそびえている関係で、又無理な言葉になった。相談の日がつづいた。業者は困り果てた。その様子はよくわかっていたけれども、私も必死だった。その木を切ることは、夫との四十年の生活を切り捨てるようなものだとさえ思っていた。

設計図を何回、引きなおしたのか。やがてコの字型の家を建てることになった。つまり柿の木を建物で囲むかたちである。

「妙な間取りになりますよ」

それを承知の上での注文である。第三者がどのように眺めても、それにこだわるつもりは全くなかった。自分の住む家である。

しかし、問題は次々に出て来た。壁の色を、風呂場の材質を、洗面所は、玄関はと。電灯に至るまでカタログを前に業者との打ち合わせである。それ等の展示場見学にまで誘われた。時間に追いまわされている日々の中で、言わば雑用は、ひどく邪魔に思われた。業者はむしろ、その方に力を入れるらしく、執拗に誘う。

「お任せしますよ」

任せられても困るのだという。出来上がった時に文句を言われたら責任のやり場がなくなるからであらう。

しかし、私は、業者の主張とは別に、写真をとり出した。その技術に全く自信はないけれども、夫の部屋を作るためには、業者に口で説明するよりも、写真を見せた方が、いいと考えたからである。決して贅沢ぜいたくな作りではないけれども、夫は、その部屋をかぎりなく愛していた。壁には、山道具がずらりと並んでぶら下がっている。ビッケルに、ザイルに、ハーケンに、そして登山服まで。

「ほこりになりますよ」

と、戸棚にしまい込むことをすすめるのだが、その都度、夫は激しく抵抗をした。「お前などが手を触れたら不潔だ」